

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

景観人類学：認知とマテリアリティのはざま：  
共同研究【若手】：  
ランドスケープの人類学的研究—視覚化と身体化の  
視点から（2012-2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5826">http://hdl.handle.net/10502/5826</a>

共同研究【若手】● ランドスケープの人類学的研究—視覚化と身体化の視点から（2012-2014）



広島で代表的とされる下町景観（2007年2月）。

本研究は、景観人類学という分野を対象とし、先行研究の整理と再考を促すことを目的としている。共同研究員は、社会・文化人類学を中心に生態人類学、考古学など多領域に跨り、また、研究対象もアジア、オセアニアから欧米と多様である。本研究は、2012年度から現在まですでに3度の研究会を開き議論を深めているが、なかでも共同研究員が関心を注いでいるテーマが、認知としての景観とマテリアリティとしての景観との関係性である。

### 認知論としての景観人類学

景観人類学という分野が英語圏で出現しはじめたのは1990年代である。社会・文化人類学は、親族、信仰、エスニシティといった社会文化事象を長らく研究の対象としてきたが、この頃より、各民族の生活環境である景観そのものの意味やポリティクスに着目する機運が高まった。もちろん社会・文化人類学が1990年に入るまで全く景観を研究の視野に入れてこなかったわけではなく、特に象徴人類学や認知人類学は、各民族による環境の意味づけや分類に着目してきた。

では、なぜ1990年代になって景観人類学という名前が出現したかという点、その理論的背景には、文化を書くことをめぐる社会・文化人類学内部での反省があった。社会・文化人類学者は、異文化を書くとき、意識的あるいは無意識的に自社会にはない風変わりな要素をとりあげる傾向にあり、それがエキゾチックでノスタルジックな異世界を生産してきたことが批判されたのである。それ以降、景観人類学では、社会・文化人類学者に限らず、地方政府、開発業者、旅行会社など外部の観察者が「現地」の一部の特色を描き、それを政治経済的な利益を得るための景観イメージとして活用してきた力学について、一層着目するようになった。

他方で、景観人類学では、以上のような外部者の利害によ

り形成される景観ではなく、そこから零れ落ちる、生活者にとって享受される景観への意味づけを拾い出していく方向性も現れた。この方向性は、人々の生活によって紡ぎ出された環境への名づけ、記憶、分類などを扱う点で、先述した象徴人類学や認知人類学の延長線上にあるといえる。しかし、景観人類学は、ある民族集団による環境認知を均質的には捉えず、階級、職業、性別、年齢、対話頻度などに応じた複数の集団を想定して、彼らの環境をめぐる認識の共有、ズレ、競合、領有といったポリティクスについて考察することを特徴とする（Bender ed. 1993; Hirsch and O'Hanlon eds. 1995; Bender and Winner eds. 2001）。

アメリカの人類学者であるパメラ・スチュアートとアンドリュー・ストラザーンは、外部者の表象により生産される前者の景観を外的景観、生活者により意味づけされる後者の景観を内的景観と呼ぶ（Stewart and Strathern 2003: 8）。景観人類学では、この2つの景観を別個に論じたり、両者の関係性を考察したりすることで、人間と環境をめぐるさまざまな意味づけやポリティクスについて、民族誌的に着目する基盤を提供してきた。このように、景観人類学では、文化を書くことへの理論的な関心に始まり、環境への表象や意味づけといった認知論を出発点としてきたのである。

### 景観人類学におけるマテリアリティ

そのうえで立って、本研究では、自然、建築物、公園、村落といったマテリアリティとしての景観（物理的景観と以下略称する）をどのように扱うかが議論の的となった。ここで注意すべきなのは、従来の景観人類学が、物理的景観を全く無視してきたわけではないということである（河合2013）。ただし、景観人類学が、認知と物質の関係について体系的に理論整理してこなかった側面も否めないため、本研究では、外的景観と物理的景観、および内的景観と物理的景観のそれぞれの関係性について議論を深めた。これらの関係性を捉える視点としては、現時点で次の4つのアプローチが考えられる。

#### (1) 外的景観⇔物理的景観

①外的景観とは、外部者の表象により政治経済的な目的でイメージされた景観を指す。例えば、中国広州市では、青レンガの壁、横木の門、煌びやかな窓が「現地」のイメージを表す外的景観となっている。ただし、これらは広州を代表する景観として昔からみなされていたわけではない。1990年代から地方政府、開発業者、旅行会社などが、都市の特色をつくり出すために学者らが書いた文化表象を参照し、そのなかから青レンガなど一部の要素を取捨選択して、それらを物質として生み出してきたのである。この事例にみるように、たとえ外的景観が文化を書く主体によりイメージ化されたとしても、それを選択する主体となるのは建築行為を手がける者たちである。外的景観から物理的景観への移行を検討する際

には、「文化を書く」行為だけでなく、「文化を読む」行為にも注意を払っていかねばならない。

②景観人類学において、地図や図面をどのように活用するかについても考慮していく必要がある。これまで景観人類学に関する研究書は、環境をめぐる認知にとりわけ着目してきたため、精緻な尺度や方角に基づく図面、地図、衛星写真をあまり活用してこなかった。しかし、例えば生態林の分布や変遷のあり方には、地方政府や開発業者などによるポリティクス、政策的立場、文化的コンセプトなどが関係していることが少なくない。それゆえ、人類学者は、外部観察者による外的景観の形成力学に着目し、物理的事象に付随する社会文化的意味を解釈することで、地図や図面にみられる物理的側面を異なる角度から理解することが可能となる。

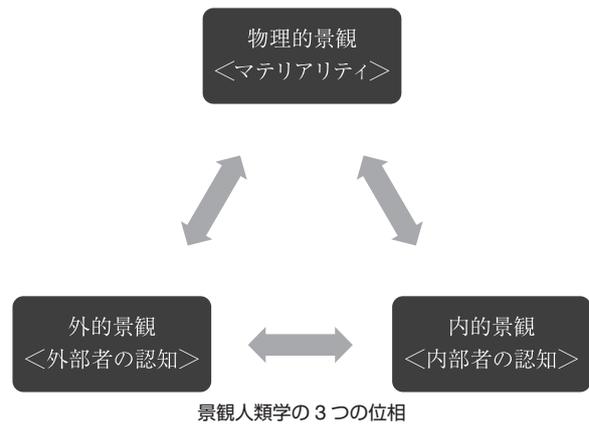
## (2) 内的景観⇄物理的景観

①内的景観とは、実際に生活する者の語り、名づけ、記憶などにより浮かび上がる景観である。従来、景観人類学の多くの研究は、世界の各民族の間で慣習的に受け継がれてきた環境への語り、名づけ、記憶を調べ、人々が環境に意味づけしてきた過程を考察してきた。同時に、景観人類学では、人々の環境をめぐる認知とともに、身体行為のあり方も研究の対象としている。例えば、ある聖地は、そこで生活する人々により単に神聖であると認知されているだけではない。礼拝されたり歌われたりといった行為が伴うことで、その場所の聖性が再生産される。人々はまた、そうした再生産の過程のなかで、祠を建てたり、岩に文字を刻んだりするので、物理的環境も絶え間なく変化する。このように景観人類学では、内的景観の再生産が物理的環境にも影響する側面を研究の視野に入れることができる。

②物理的環境の絶え間ない変化が、人々の行為や内的景観に影響するという逆のパターンを模索する可能性も、研究会では提示された。特に、洪水などで物理的環境が毎年変化してしまう地域の場合、人々による意味づけを景観に継続的に付与することが困難になる。物理的景観の変化に応じて人々が生活を営み、認知を生み出す過程もまた、景観人類学が着目していくべき点である。

## 景観人類学の3つの位相 試論

このように外的景観、内的景観に加え、物理的景観も研



究の対象に入ると、多様な主体が現実に景観をつくりあげていく行為や実践をより浮彫りにすることができる。それにより、景観人類学の議論において、環境をめぐる認知のポリティクスだけでなく、政策行為、身体実践などの行為論を組み込むことが可能となる。つまり、図で整理すると、従来の景観人類学で特に着目されてきたのは、三角形の底辺にあたる認知論の部分であった。そのうえで、景観人類学では、両極にある外的景観と内的景観のズレ、競合、領有などのポリティクスを扱ってきた。筆者は、このベクトルそのものを否定するものではなく、今後も両者の相互転換、併存などをより検討していくべきだと考えている。だが他方で、景観人類学の議論において、マテリアリティをより重視し、景観をめぐる実践、および物理的環境の変化なども考慮していく余地もある。特に、社会・文化人類学以外の分野では、物理的景観それ自体が研究の対象となることもある。したがって、外的景観をめぐる文化の政治学、および内的景観をめぐる生活実践の人類学的調査は、物理的景観を理解する他分野への貢献をなすだろう。

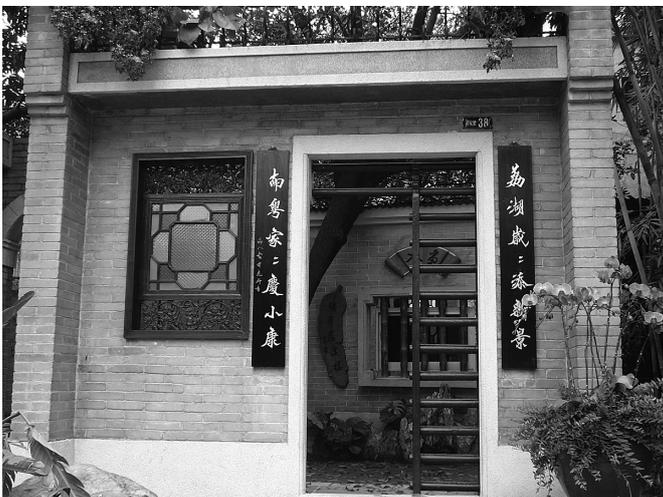
以上より、本研究会では、景観人類学をめぐる3つの位相を仮説として提起することで、従来の議論を再考し、研究の幅を広げるよう努めている。今後は、外的景観、内的景観および物理的景観それぞれの相互関係を、異なる視点と調査データから再検討するとともに、景観人類学の3つの位相を軸に有効なアプローチを模索していくことが目的となる。

## 【参考文献】

- Bender, B. (ed.) 1993. *Landscape: Politics and Perspectives*. Oxford: Berg.  
 Bender, B. and M. Winner (eds.) 2001. *Contested Landscapes: Movement, Exile and Place*. Oxford and New York: Berg.  
 Hirsch, E. and M. O'Hanlon (eds.) 1995. *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press.  
 Stewart, P.J. and A. Strathern (eds.) 2003. *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press.  
 河合洋尚 2013『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』風響社。

## かわい ひろなお

国立民族学博物館研究戦略センター助教。専門は社会人類学、都市人類学、景観人類学。漢族地域における都市景観およびエスニシティ空間の人類学的研究をしている。著書に『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』（風響社 2013年）、論文に“Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou” *Asia Pacific World* (International Association for Asia Pacific Studies, 2012) など。



青レンガ、横木の門、窓の3点セット（2007年2月）。